

教会暦と聖書の流れ

イエスのエルサレムへの旅、十字架を経て天に向かう旅が続いています。この旅の段落の中に、ルカは他の福音書にないイエスの多くのことばを伝えています。きょうの箇所のためにもルカ福音書だけが伝えるものです。

福音のヒント

(1) 1節～8節前半のたとえば、かなり分りにくいと感じられるでしょう。主人が人に貸したものを管理人が勝手に減額してしまうというのは、普通ならほめられるはずがないことです。なぜ「主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた」のでしょうか。ただ、この管理人の「抜け目のなさ(賢さ)」だけ进行评估しているということなのでしょう。だとしても「ほめる」というのは少し無理があるように感じられるでしょう。



この管理人の行為については、別の見方もあります。1つは、管理人が放棄したものが実は自分の受け取るはずの手数料だったという解釈。手数料を放棄したのであれば、そのこと自体は不正とは言えないこととなります。もう1つは、管理人は利息分を棒引きしてやったという解釈です。利息をとって人に貸すことは律法で禁じられていましたが、実際にはどの時代にも行われていました。50バトス貸したときに100バトス貸した、とか、80コロス貸したときに100コロス貸した、という証文を書いておけば、この差額が実際には利息分だということになります。利息分を棒引きすることは主人の利益に反しますが、本来利息を取ること自体が悪だとされているので、主人は文句を言えないわけです。

(2) たとえ話の結論は、「そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい」(9節)です。「不正にまみれた富」は直訳では「不正なマンモン」。「不正によって得たお金」というよりも「神から離れた、この世のものである富」という意味です。お金とどうかかわるべきか、お金をどう使うか、というのが、10節以下でもテーマになっています。「友達を作る」は富を貧しい人に施すことによって、貧しい人の友となり、神がそのことを顧みて、受け入れてくださる、と取ることができるようでしょうか。あるいはそうすることによって「神を友にする」とも取れるでしょうか。

(3) 10-12節で「富について忠実」であることが求められていますが、それはもちろん「富に忠誠を尽くす」という意味ではなく「富を誠実に、正しく扱う」ということです。「忠実」は「ピストス pistos」の訳で、「不忠実」は「アディコス adikos」の訳です。adikos は8節の「不正な adikia」と同じ言葉ですが、内容的には結び付きません。ここから見ても、

10節以下の教えは、本来、前のたとえ話とは別の教えだったようであり、切り離して考えたほうが良さそうです。13節の「神と富とに仕えることはできない」という教えは、マタイ6章24節(山上の説教の中)にもあり、これも直接12節までとつながっているというより、13節だけで独立した教えと考えたほうがよいでしょう。このあたりは、「富」というテーマのつながりで、イエスのいろいろな言葉がつなぎ合わされているようです。

お金との関わり方というのは確かにわたしたちにとって大きなテーマです。お金の縛られたり、お金の振り回されている現実はだれにでもあるはずですが、しかし、わたしたちは、お金がすべてではなく、お金が神ではないことも分かっているはずですが。10-12節の言葉で言えば、もし、富が『ごく小さな事、不正にまみれた富、他人のもの』だとすれば、何が『大きな事、本当に価値あるもの、あなたがたのもの(自分自身のもの)』なのでしょうか。それは神とのつながりでしょうか、人と人とのつながりでしょうか、自分自身の生き方でしょうか。お金のそれらのものを妨げてしまうと感ぜられることもきっとあるでしょう。わたしたちの生活の中で、きょうのイエスのことばをどのような呼びかけとして受け取ることができるのでしょうか？

(4) 1-9節の別の読み方を紹介します。実はきょうの福音のたとえ話は、15章の3つのたとえ(百匹の羊、十枚の銀貨、放蕩息子の父)に続いて語られていますが、ここで突然「富」がテーマになるとしたら不自然ではないでしょうか。本来はこのたとえ話も15章同様、「罪のゆるし」がテーマだったと考えてみてはどうでしょうか。福音書の中で「罪のゆるし」が「借金の帳消し」のたとえで語られることがあります。「主の祈り」もそうですし、ルカ7章41-42節やマタイ18章23-34節もそうです。神は借金が返せずにも行き詰ってしまった人間を見て、憐れに思い(マタイ18章27節「スプランクニゾマイ」)、何とか生かそうとする。これが「借金の帳消し」の意味であり、神のゆるしなのです。きょうの箇所の管理人は自分の不正によって行き詰ってしまいましたが、その行き詰まりを打開し、なんとか生き延びるために彼がしたことは、主人に負債のある人の負債を勝手に減免してしまうことでした。それは「罪びとである人間が、他の罪びとをゆるしてしまう」ということを表しているのではないのでしょうか。さらに、「主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた」(8節)というのは、「実は、それが神の望みでもあったのだ」ということではないのでしょうか。

ルカ15章1-2節で、イエスは徴税人や罪びとを迎え、一緒に食事をしていると非難されました。非難したファリサイ派や律法学者からすれば、その人々は神が絶対にゆるさないはずの人々でした。だから自分たちがゆるす必要もないのです。しかし、イエスにとっては、人が「罪びと」をゆるし、受け入れることこそが神の心にかなうことだったのです。このように考えると、「不正にまみれた富で友達を作りなさい」(9節)という結論は、「人が人をゆるし、人と人とが友として和解すること」を勧めていることになります(もちろん、このように考えると、このたとえ話は10節以下の富についての教えとは関係がないことになります)。

どのような解釈を取るにせよ、わたしたちも本当はどこかで行き詰っていて、絶体絶命のピンチにあると言えるのかもしれませんが、もしそうならば「その時、この不正な管理人はどうしたか」は何かのヒントになるのではないのでしょうか。